

2012年 12月 1日 Vol.0073

鈴木宗男事件 ②

---

■本丸に手をつけられず残りカスが立件された

鈴木議員をめぐる一連の疑惑のうち、全てが立件されたわけではない。というよりも、東京地検が立件したかった肝心の本丸が、立件へと結びついていない。特捜部の本来の目的が達成されてなかったという意味で、彼らの捜査は失敗に終わったと私は見ている。

具体的に説明しよう。

先ほど話題に挙げた「ムネオハウス」疑惑につき、鈴木氏は立件されてはいない。また国後島のディーゼル発電施設事件についても、鈴木氏は立件されなかった。イスラエル関連の学会への不正出資についても鈴木氏はなにも問われてはいない。

ちなみにディーゼル発電施設とイスラエル学会への不正出資疑惑については、外務省の佐藤優・元主任分析官の有罪判決（執行猶予付き）が確定している。

東京地検特捜部としては、「ムネオハウス」疑惑やディーゼル発電施設事件について鈴木氏を起訴できると睨んでいた。だが実際に調べてみれば、これらの疑惑について事件性など何もないことが分かってしまった。

マスコミにどンドンリーク情報を流し、疑惑をあおりたてておきながら、結局肝心の本丸を立件できない。ずいぶん行き当たりばったりな捜査だったと思うし、東京地検特捜部はなぜか相当焦っていたとしか考えられな

い。

鈴木氏が立件された「やまりん」からのあっせん収賄罪は、金額がたった500万円だ。島田建設からの受託収賄罪について問われた額は、600万円である。国会会期中に現職の代議士に逮捕状を出し、衆議院で逮捕許諾決議まで採決させる。東京地検特捜部が大々的に動いたにしては、やけにスケールが小さすぎる事件だ。

現役の国会議員に特捜部が戦争を挑むのであれば、普通は3000万円以上の案件を調べ上げるのがそれまでの「暗黙の了解」だった。国会議員にまつわる過去の事件に比して鈴木宗男事件はどう見ても金額が小さすぎる。あんなお祭り騒ぎを展開し、代議士を長期勾留するような事件とはとうてい思えない。

特捜検察は本来、「ムネオハウス」関係、さらには外務省関係の事件で鈴木宗男議員にとどめを刺したかった。だが肝心の事件はとても立件するに足りるような中身ではなかった。仕方がないので本来の目的から外れた残り物に手をつけた。これが実際のところだろう。

あとから取ってつけたような事件でもって、国会議員の政治生命にとどめを刺す。元検察に籍を置いた私が言うのもおかしいが、実にとんでもない「国策捜査」だ。

#### ■マスコミへのリーク情報で世論を煽動する

特捜検察は、事件を立件するにあたって積極的にメディアを活用する。懇意にしている番記者に向け、適度に小出しにしながらリーク情報を流す。記者は「関係者」がしゃべっている匿名情報として扱うが、捜査当局の検察から直接聞いた情報だから、言ってしまうと合っているのか間違っているのかは関係ない。メディアは裏付け調査もせずにそのままリーク情報を記事にしてしまう。

一社が独占情報を抜け駆けすれば、他社も焦って追いつこうとする。大勢の記者がこぞって取材してくれるおかげで、一つの情報が何倍、何十倍にも拡散するのだ。

こうして徐々に徐々にリーク情報を流しながら、立件へ向けて着々と準備を進める。被疑者を逮捕した段階では、すでに世間では「大悪人」のイメージが広がっている。メディアを巧妙に使うことで、特捜検察は捜査がしやすくなるのだ。

鈴木議員が逮捕された直後の新聞報道を振り返ってみよう。

≪「政治を金に換える腕前は、相当のものだった。永田町で半径1キロ以内に落ちた千円札の音が聞こえるとさえいわれた」というのは永田町関係者だ。

北海道では、公共事業などを受注した業者から「口利き料」として受注額の5%を徴収し「5%男」とも呼ばれた≫（2002年6月20日付／産経新聞）

「千円札の音が聞こえる」「5%男」とはいかにもリーク情報らしい。読者の耳目を惹きやすく、キャッチコピーになりやすい言葉をこうしてメディアに流していくのだ。

≪「ロシヤ外交のドン」「裏の外相」とも呼ばれ「二島先行返還論」を唱えて独自に対露外交を進めた。コンゴなどアフリカ諸国でも、外交の表舞台に。担当記者に、官僚から取り上げた内部書類をもとにしたネタを流して特ダネを書かせるなどし、「マスコミを手なずけていた」とも。（同）

まるで他人事のような書きっぷりだ。そういう産経新聞の検察担当記者だって似たような仕事を日頃していたのではないだろうか。

#### ■マスコミは特捜検察にとっての防波堤

反省を込め、かつての自分を振り返ってみたい。マスコミへのリークは、検事時代に日常的にやっていた。

誰かを逮捕・起訴した時には、検察は記者会見を開く。公式会見の場で、記者からの会見はもちろん受ける。それとは別に、非公式の取材も受け

る。高松地検次席時代は、お昼過ぎから午後3時ころまでの間に1時間ほど空け、新聞記者と会う時間を決めていた。

1人の記者につき10分ほどの時間を区切り、番記者に次々会っていく。しょっちゅう顔を突き合わせていれば、記者ともだんだん気心が知れてくるものだ。1番仲がいい記者には特別に独占情報を流してあげることもあった。すると記者は舞い上がり、憶測も交えた記事を派手に書いてくれる。

新聞記者の日課は、毎朝届く各朝刊を見比べることだ。他社を見て抜かれたスクープ記事があれば、悔しがりながら後追い記事を書く。捜査する側にとってこんなありがたいことはない。あとは検事が積極的にリークしなくとも、憶測が憶測を呼んでバブルのようにマスコミ報道がどんどん膨らんでいく。

これを検察内部では、「リークで風を吹かせる」と表現したものだ。

風を吹かせるといっても、何も私がウソや風聞を吹聴していたわけではない。検事によってリークの使い方は異なるが、私の場合、容疑者が明らかに嘘と思われる自供を繰り返している時に、意図的に情報を流すようにしていた。一般の人が見ても明らかにウソとしか思えない、そういうわかりやすい事件について、特に積極的にリークをした。

「あいつがこんなことを言っているのか。とんでもないな」

そういう認識が広まれば、世論を味方につけたのも同じ。検察としても捜査がしやすくなるのだ。

私の場合では、番記者が非公式取材する際の窓口は次席検事だった。次席検事以外の検事がコソコソ会いに行くと、少し厄介なことになる。記者クラブの和を乱すような動きをする記者は、下手すると検察から出入り禁止処分を食らってしまう。1番重い処分は、事件の起訴まで出入り禁止処分を食らってしまうことだ。「出禁」を食らえば、1社だけ表向きには事件取材が全くできなくなってしまう。

ただし、そうは言っても新聞記者もプロの情報屋だ。次席検事以外に、事

務官や平の検事へも取材するのは暗黙の了解だった。検察がガサ入れ（家宅捜査）をかけるときには、必ず事前に情報が漏れてしまう。次席検事の私が一言もガサ入れの情報を教えてないのに、現場に言ってみると新聞記者がちゃんと待っている。ガサ入れをするチームの中で、誰かが情報を漏らしているのだろう。

記者を呼んで、

「ガサの情報はいったいどこから漏れたんや」

と問い詰めても、彼らも情報ソースは絶対に口にしない。そんなふう向记者との駆け引きをしたことを、今でも思い出す。

鈴木宗男事件の報道をあらためてみると、検察の作り話をどんどん流していた様子がよくうかがえる。番記者はこぞって特捜検察のもとへ出かけ、毎日リーク情報をもらっていたのだろう。とくに鈴木宗男事件の場合は、外務省内部からもキナ臭い情報が相当漏れていたようだ。

本丸の捜査は失敗したが、大量のリーク情報が流れたことによって「鈴木宗男＝大悪人」のイメージは揺るぎないものになっていた。だから東京地検特捜部の中途半端な捜査に対する批判は全く起こらなかった。世間からの検察批判を避けるためにも、マスコミを防波堤に利用することは大いに役立つというわけである。

「権力」に操られる検察（三井環 著）より 次号に続く

---

著者：三井環（元大阪高検公安部長）